

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370140

研究課題名(和文)中国における涅槃図像の変容に関する研究—敦煌・西安・四川の相関関係—

研究課題名(英文)A study on the transformation of nirvana image in China

研究代表者

村松 哲文(MURAMATSU, tetsufumi)

駒澤大学・仏教学部・教授

研究者番号：30339725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：中国の涅槃像を検討すると、初期の涅槃像は仰向けに表現されて、6世紀末頃になると右脇を下にした姿に変化する。釈迦の涅槃に入る姿については、初期経典に右脇を下にした姿で描写されており、インドでも釈迦の涅槃像は右脇を下にした表現が行われてきた。本研究では、中国では、なぜ経典の記載とは違う涅槃像を表現したのか。それがなぜ経典記載通りの姿になったのかを考察した。

は中国に涅槃という概念が入ってきた際に、中国の人々はそれを「涅槃」ではなく「死」として捉え、通常の人間の死の姿として表現した。は「涅槃」を「深い悟り」と正しく解釈したのが6世紀末頃で、それが右脇を下にした涅槃像を誕生させたかと推測できる。

研究成果の概要(英文)：When considering the nirvana image in China, the early Nirvana statue is expressed supine and notice that it changes to the figure with the right side down when it is around the end of the sixth century. Nirvana statue is depicted in the scripture with the right side down. In India, Nirvana statue was imaged with figure with right side down. However, because I did not understand nirvana accurately in China, Nirvana statue was expressed on his back.

It is speculated that in the late 6th century, China understood nirvana. And also in China, Nirvana statue began to be expressed in a figure with the right side down. The expression of Nirvana statue in China is presumed to be related to understanding of Nirvana.

研究分野：中国の仏教美術

キーワード：中国 涅槃 涅槃像 敦煌 仰向けの涅槃像 儒教 仏教

1. 研究開始当初の背景

仏教美術の中で涅槃像についての研究は、従来特に大きな問題を見出さないまま過ぎてきた。報告者は、こうした中で中国の涅槃像の変遷過程に着目し、それが初期の段階で仰向けに表現され、ある時から右脇を下にした図像に変化することについて関心をもち、その変化について考察することにした。

釈迦の涅槃は、仏伝図の中でも一番クライマックスである。その表現はインドから始まり、シルクロード、中国を経て朝鮮半島、日本にまで伝わる。しかし、その姿勢について観察すると、インドでは管見の限り、経典に記される通りの右脇を下にした姿の涅槃像しか観察することができない。

一方で中国の涅槃像を観察すると、中国初期の涅槃像である北朝期の作例では、「仰向けの涅槃像」(図版1~6)が主流となっている。すでに涅槃関係の経典が中国に伝来しているにもかかわらず、作例を観察すると、あえて右脇を下にしないで仰向けに涅槃像を表現していることが分かる。この変化について焦点を定め研究を進めた。



図1、雲岡石窟 第11窟西壁 北魏

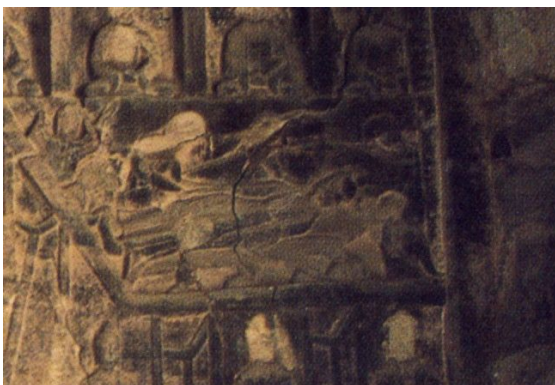


図2、雲岡石窟第35窟東壁 北魏



図3、龍門石窟魏字洞 北魏



図4、龍門石窟普泰洞 北魏



図5、四面石 東魏 大阪市立美術館蔵



図6、台座浮彫 北齊（天保十年銘）  
東京国立博物館蔵

## 2. 研究の目的

釈迦の涅槃について、経典では「右脇を下にした姿」と記されている。しかし、中国ではあえて、「仰向けの姿」で表現されるところから涅槃像の表現が始まる。そして、ある時期になると経典の記載通りの姿勢に変化する。こうした図像の変容が如何なる理由によるものか考究することが、本研究の目的である。

中国で涅槃の姿を表現する際に、故意に経典の姿を表現せず、仰向けにした理由は何か、そこには中国で何らかの事情があったはずであるという仮説に基づき考察を遂行した。

特に涅槃（nirvana）とは、仏教では深い悟りとか静寂な状態と考え、決して死という概念ではない。こうした点を理解していないと、歴史的な人物としての釈迦の死を捉えることは難しい。釈迦の死は、人間の死という状態ではなく、悟った者がさらに深い悟りに至った状態を示す。

それが『涅槃経』に載る「已即入初禪。以涅槃光遍觀世界入寂滅定。爾時世尊所言未訖即入初禪。從初禪出入第二禪。從二禪出入第三禪。從三禪出入第四禪。從四禪出入虚空處……（中略）從空處出入第四禪。從四禪出入第三禪。從三禪出入第二禪。從二禪出入第一禪。」という状況である。しかし、これを理解できない場合に、死と捉える可能性もあると考えられる。こうした状況に鑑み、中国の涅槃像の変遷を辿ることにした。

さらに中国は広いので、地域による差もあるものと考慮しつつ検討を進めた。

## 3. 研究の方法

本研究では、中国における「仰向けの涅槃像」と「右脇を下にした涅槃像」図像の収集から始めた。一方で経典の記載等を確認することを進めた。また、歴史的な背景を検討することも行った。そして、その成果を比較検討することにより、図像の変化と経典内容・歴史的な背景を照らし合わせ精査した。

今回の検討では、新たに陝西省薬王山の造像碑（図7・8）にも着目し検討した。従来報告者は、仰向けから右脇を下にする変遷のターニングポイントを隋代頃と推定してきた。しかし、薬王山の石碑は、北周の銘をもつ作例で、右脇を下にした涅槃像を刻んでいる。これは現在までのところ報告者が確認した右脇を下にした涅槃像の最も古い作例となる。この点も今回の研究では焦点となるものであった。



図7 田元族造像碑  
北周保定三年銘 薬王山博物館蔵



図8 田元族造像碑拓本部分  
薬王山博物館蔵

文献による検討では、涅槃経関係の經典類を精査したが、今回特に留意される点は見出されなかった。しかし、先述のような『涅槃経』の「第一禪から第二禪へ……」という記載に目が止まり、涅槃を解釈する上で「禪」というキーワードも重要であり、初期仏教の中で「禪」という場合に、涅槃という概念を重ね合わせて考える必要性を感じた。つまり「涅槃 (nirvana)」と「禪 (dhyāna)」の解釈を如何に合わせて理解するかという新たな課題も出てきた。

涅槃図像の2種、仰向けの涅槃像と右脇を下にした涅槃像を収集整理をしたこと、涅槃関係の經典を整理したことにより、その二つの成果を検討することが本研究の主な研究方法であった。

さらに今回は、中国初期の涅槃像が頑として仰向けにした理由を検討するため、報告者は儒教関係の文献も整理した。予期したことは、『儀礼』などの中に死者の寝かし方が記載されていないか鑑みてみたが、特に姿勢についての記載はなかったが、頭の向き等に留意される点があった。

一方で古代の中国の死者の葬り方を検討すべく、古い作例となるが漢代の「金縷玉衣」に目が止まり、中国の死者の姿勢は仰向けが基本であるということを確認した。こうした考古学的な遺品の検討した。

#### 4. 研究成果

中国の「仰向けの涅槃像」(図9)が、6世紀末頃から「右脇を下にした涅槃像」(図10)に変化した現象を確認し、6世紀末頃に「涅槃を死」ではなく、仏教でいう「完全なる悟

りの状態」と理解し、そのため仰向けの死の姿勢ではなく、右脇を下にした姿勢にしたと推測した。今回は従来報告者が、その転機の時期を隋代とした点を北周と改めたが、まだ全体の流れを掴んでいないので一時的なまとめとして考え、その転機についてはまだ保留しておきたい。



図9、敦煌石窟第428窟(仰向け) 北周



図10、敦煌石窟第295窟(右脇下) 隋代

さらに、右脇を下にしなかった理由については、涅槃を正確に理解しなかった背景に、儒教的な精神が強かったと推測した。その裏付けとして、考古遺品である「金縷玉衣」などの埋葬物からの死者の姿勢である。また『儀礼』などの文献にあえて死者の姿勢について記載されていないのは、仰向けが通常のこととして捉えられていた証と考えられる。

よって、中国の涅槃像があえて經典に記された姿勢ではなく、仰向けにされたのは、仏教的な解釈ではなく、あくまで中国の伝統的な死者の葬り方からできた表現であり、そこには涅槃 (nirvana) という解釈はなかったものと推測されるのである。

そして、北周から隋代にかけて經典解釈が進み、また釈迦の死について考える機会、仁寿舍利塔の建立などがあり、涅槃に対する関心が集まり、死ではなく完全なる深い悟りとして理解された。その具現化として、「右脇を下にした涅槃像」が誕生したものと推測されるのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

村松哲文「陝西省薬王山博物館蔵「田元族造像碑」の涅槃像が意味すること」『駒澤大学仏教学部論集』47号 2016年 pp205 - 218  
査読有

[http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/36084/?lang=0&mode=0&opkey=R153007800503629&idx=1036&chk\\_schema=100%2C200%2C300%2C290](http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/36084/?lang=0&mode=0&opkey=R153007800503629&idx=1036&chk_schema=100%2C200%2C300%2C290)

村松哲文「涅槃図」『禅の風』44号 2015年 pp12 - 37 査読無

〔学会発表〕(計1件)

村松哲文「頂相研究の諸問題」国際禅研究プロジェクト第3回研究会 2017年

〔図書〕(計1件) パーリ学仏教学会・上座仏教事典編集委員会『上座仏教事典』めこん社 2016年 編著

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

村松 哲文 (MURAMATSU, tetsufumi)

駒澤大学・仏教学部・教授

研究者番号：30339725